五家荘と「切り捨て御免」

　五家荘の人達は、五家荘攻撃の中止の後からは塩売り勘兵衛とも連絡がつかず、また菊池家の厳しい見張りもあって、ほしい物が手に入らなくなり、いくつも山を越え苦労して今でいう球磨郡の水上・湯前や宮崎県の椎葉方面に出かけて物の交換をしたのでした。年々、五家荘の人数が増え続けたため、秘密に物を運ぶことができなくなりました。とうとう隠れて暮らすことができなくなり、五家荘の人達はみんなで話し合って全員殺されてしまうかもしれないけれども、菊池氏の殿様に変わって、この地を支配していた阿蘇氏の殿様に申し出たのでした。このとき初めて五家荘に人が住んでいたことが世の中に初めて知られたのです。
五家荘が世の中に知れ渡ると同時に五家荘に入ってくる者も厳しく取り締まられました。西の柿迫が表口となり、ここから入る者は理由を前もって申し出て許しを得た上で、その関係者以外は立ち入ることはできませんでした。そして東の椎葉村那須が裏口となり、ここから入る者はその理由に関係なく、切り捨てて殺しても良いというものでした。それは椎葉村には那須大八の子孫が住み着き、平家の落人にとってはいつ山を越えて攻めてくるかとても心配していたことから、東の那須口から来る者は商人であろうと百姓であろうと「檀那」と呼ばれる地位を持った人には、切り捨てが許されていたのです。そのとき東から五家荘に入る道は、椎葉村から樅木ルート、樅木から国見岳への日向・矢部ルート、球磨郡水上村から久連子ルート、そして水上村から樅木ルートの４つがありました。事実、久連子には七人塚は水上村から入ってきた七人を切り捨てられた人の墓があります。また、五木村から山越えをして入ってくる者を待ち伏せして切り捨てたという場所が待切（まちきり）という集落の名前になっています。
また、切り捨てられるとき、その両親は「自分たちは覚悟しているが、何とか子どもだけは許してくれ。」と一生懸命に頼んだのですが「切り捨て御免」の法を破るわけにはいかなかったそうです。
同じように仁田尾の水梨地区にも七人塚があります。これも砥用

や四浦方面に向かう親子ずれが殺されてしまった場所だそうです。